

※ 解答にあたっては、句読点などの符号も一字分として数えること。
なお、「Ⅱ」「Ⅲ」の文章は、問題の都合上、本文の一部を変えてあります。

- 【Ⅰ】次の各文の——部のカタカナをそれぞれ漢字に改めなさい。
- 1 世界一周中の客船が横浜にキコウした。
 - 2 タンカーで原油をコソウする。
 - 3 一年間のホシヨウがついた商品。
 - 4 シヤソウの景色を楽しむ旅。
 - 5 大雪で列車が立ちオウジヨウする。
 - 6 宇宙のシンピを探る。
 - 7 セイも根もつきはてる。
 - 8 地震対策をコウじる。
 - 9 海岸にソった道を歩く。
 - 10 目上の人をウヤマウ。

【Ⅱ】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、各段落には【1】～【15】の番号を記しました。

最後に、①エコな(注・環境にやさしい)暮らしを目指す人たちの錯覚がなかなか抜けない話——温暖化と北極、南極の水の関係について簡単にまとめておきます。

【2】まず、北極の水ですが、北極の水のほとんどは海に浮いています。海に浮いている水はアルキメデスの原理によって、溶けても凍っても海面は変わりません。理由は次の通りです。

【3】水と水は同じもので、もし水が氷になって重たくなれば氷は沈みますが、実際は軽くなるため、水に浮かびます。なぜ水が凍ると軽くなるかというと体積が増えるからです。どのぐらい体積が増えるのかというと、
「Ⅰ」だけ大きくなります。ですから、浮かんでいる氷が溶けると、もとの体積、つまり「Ⅱ」に戻るの、まったく水面は変わらないのです。

【4】次に、南極の水です。

【5】南極の水は気温が「暖かくなる」と少し「増えます」。暖かいと氷が増えるというのですから、多くの人は奇妙に思いますが、昔、霜取りを自分でしなければならなかった冷凍庫があった時代を思い出してください。

【6】冷凍庫の中にお湯を入れると、湯気で霜が増えるという経験をした方は多いと思います。マイナス二〇℃とか五〇℃というような冷えた空間があると、そこにある水が温かくなればなるほど蒸気があがって、霜が多くなります。つまり南極では、周囲の海が温かくなると、海から立ち上った蒸気が南極大陸の中心部に雪となって降るので氷が増えるのです。

【7】もともと、現在の南極大陸の水は雪からできたもので、中心部には雪が降っています。中心部の気温は、現在、マイナス五〇℃ですから、二～三℃高くなっても②その状態は変わりません。これはIPCC(注・政府間で地球温暖化問題の対策を検討するために、国連と世界気象機関が設立した組織)が「気温が温暖化すると、南極の水が増える」と言っていることと符合します。

【8】このように、北極南極の水はそれほど心配したことはないのですが、アルプスなどの氷河などが溶けて海水面が上がると心配している人もいます。アルプスやキリマンジャロの雪が減っていると言われていますが、海が膨大な広さなので、それに比較すると氷河の氷は少量で問題はないとされています。

【9】では、実際、温暖化によって日本の海水面がどのくらい上がるかというIPCCの報告についてここで述べられている。

うと、約一〇センチくらいは上がるだろうと言われています。温暖化で海水面が上がるのは、熱で膨張するからです。

【10】ただ、季節によっても海水面の高さは変わっています。日本では、海水の温度が上がる夏は、冬に比べて毎年、温暖化しますから四〇センチメートル上がります。また、台風がくると、低気圧になりますので海水が膨張します。五〇ヘクトパスカル気圧が低下すると、五〇センチメートル上昇するという具合です。普段から、これだけ海水面が上下していても私たちの生活に支障はありませんから、温暖化で上がると言われる一〇センチというのは、それほど大きな値ではないのではないのでしょうか。

【11】最近の日本の報道は、視聴者を驚かせないと視聴率などがとれないので、③あの□この□で④事実とは違うことを報道します。その一例が、ツバルという南太平洋に浮かぶ小さな珊瑚礁の島国です。テレビでは海水面が上がって島が水浸しになり、そこで泳いでいる子供たちが映ります。そんな映像を見ると、これは大変だということになります。ツバルの近辺の海水面上昇を測定しているハワイ大学の記録では、海水面上昇は五センチとされています。この地域の海水面上昇はハワイ大学のデータしかないのです。温暖化を考える際にはこの数字を使っています。

【12】確かに五センチ上がっているのだと思いますが、五センチでは水泳はできません。また五センチ海水面が上がるとするのは、小さな低気圧がきたらそのくらい上がりますから、そんな島には普段から住めないことになります。

【13】この地域の国の独立は一九七八年になってからなので、個々の島を特定することはできませんが、第二次世界大戦当時、アメリカ軍が来て急ごしらえの飛行場をブルドーザーで整地したところが地盤沈下しているようです。もともと、日本でも大阪などの大都市の地盤沈下が激しく、この百年で三メートル近く海水面が上がっています。でも日本のような工業国はその対策をしますから、三メートルぐらいいは克服してきましたが、ツバルはなすすべもなく地盤沈下の影響を受けていると思われます。

【14】「なぜ、マスメディアは国民を脅すのですか？」とよく質問されます。この質問の答えは大変難しいのですが、マスメディアは何か国民に警告を出さなければならぬとの使命感を持っている感じがします。とはいえ、その警告は、記者がほとんど何の根拠もなく心配したことを、それを裏付けてくれる学者のところに行って取材をし、記事にするというプロセスをとります。学者は学問の自由があり、人によって考えていることが違うのですが、このような取材方法のもとでは⑤どうい結論の記事でも書けるということになります。

【15】現在の日本のように、言論に自由があつて、何でも書けることはよいことなのですが、それだけに、

(武田邦彦『偽善エコロジー』による)

問1 段落【1】～【15】を、内容から五つの部分に分けるとどのようなになりますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア	1 3	4 7	8	9 14	15
イ	1 5 7	8	9 10	11 13	14 15
ウ	1 3	4 8	9 10	11 14	15
エ	1 5 8	9	10	11 13	14 15

問2 部a「だ」・b「ような」と同じ意味で用いられているものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a「だ」

- ア 今日の海はおだやかだ。
イ この作品こそが本物だ。
ウ 自信を持って生きるのだ。
エ プレゼントをもらって喜んだ。

巢

b「ような」

ア 弟は泣いているような顔をしていた。

イ 経済が回復に向かうようなきざしが見える。

ウ 真綿のような雪がふんわりと降ってきた。

エ チョウのような美しい虫を集める。

問3 次の一文は本文中のある段落の末尾からぬき出したものです。入るべき段落を1～15から選び、番号で答えなさい。

電気ポットに水を入れるときに少しフタより控えたところに線が入っていて、それ以上は入れないようにしているのも同じ理由からです。

問4 部①「エコな暮らしを目指す人たちの錯覚がなかなか抜けない話」とありますが、この「錯覚」とは、どのように考えることですか。「と考えること」につながるように三十字以内で答えなさい。

空らん Ⅰ ≪ Ⅱ ≫ に入る言葉の組み合わせとして、最も

問5 適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ⅠⅡ海の上に見える氷の部分

ⅡⅡ海面の下にある、見えないところの氷の体積

イ ⅠⅡ海面の下にある、見えない氷の部分

ⅡⅡ海の上にある、見えるところの氷の体積

ウ ⅠⅡ膨張して元の水より重くなった重さに相当する分

ⅡⅡ氷になる前の、まだ膨張していない体積

エ ⅠⅡ氷になって膨張する前の重さに相当する分

ⅡⅡ膨張して元の水より重くなった重さに相当する体積

問6 部②「その状態」とはどのような状態のことですか。「状態」につながるように三十字以内で探し、はじめと終わりの三字をぬき出して答えなさい。

問7 部③「あの□この□で」の二つの空らんには同じ言葉が入ります。それを漢字一字で答えなさい。

問8 部④「事実と違うことを報道します」とありますが、その一例としてあげられているツバルに関して、(1)事実と違うと筆者が考えていることと、(2)事実であると筆者が考えていることを、「ということ」につながるように、それぞれ三十字以内でまとめなさい。

問9 部⑤「どういう結論の記事でも書ける」とありますが、このような取材の姿勢を表す四字熟語として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 温故知新

イ 主客転倒

ウ 自画自賛

エ 我田引水

オ 温故知新

カ 主客転倒

ク 自画自賛

ケ 我田引水

コ 温故知新

ク 主客転倒

ケ 自画自賛

コ 我田引水

カ 温故知新

キ 主客転倒

ク 自画自賛

ケ 我田引水

コ 温故知新

ク 主客転倒

ケ 自画自賛

コ 我田引水

カ 温故知新

キ 主客転倒

ク 自画自賛

ケ 我田引水

コ 温故知新

C君 今後数千年の間は地球温暖化による海水面の上昇はなさそうなので、マスメディアの誤った報道におどらされて、取り越し苦労をするのは無益なことだと思う。

D君 学問の自由により学者はそれぞれの視点から自分の説を主張しているのだから、地球温暖化の影響についても、筆者と違う視点から見ると、全く異なる結論が導き出されるかもしれない。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちが普通、身体といったときにはどんな身体をイメージするでしょうか。身長、体重、足の長さ、顔の形や髪の毛の長さといったⅠ的なことや、力が強く筋肉が発達しているとかいうⅡ的なこと、あるいは脂肪が多いといったⅢ的なことなどさまざまでしょう。

A ここで身体についてどのように理解すればよいのかについて触れておきましょう。

まず、第一にいま述べたようないわゆる①生理学的な身体、肉体としての「からだ」が考えられます。体格や器官、組織の構造がどうなっているのか、その働きはどうか。たとえば、筋力や持久力などはどれくらい強く、あるいは長くエネルギーを出すことができるのかといったこと、また敏捷性(注・動作などがすばやいこと)、平衡性(注・バランスの取れていること)、巧緻性(注・きめ細かく巧みであること)、柔軟性(注・やわらかく弾力があること)といった調整する力がどれだけあるかといったことが重要になってきます。体格が大きくなる一方で運動能力が低下している現状は、これらの調整する力が低下しているということも含め、たいへん危険だといえます。

第二には、社会的規範(社会的な考え方、社会意識、ルール、マナー等)が②宿命的に宿る場としての「からだ」です。この点は説明が必要ですね。

自分の身体はもちろん自分のものなのですが、身体のある方に関する評価——太っているよりも痩せているほうがよい身体であるとか、背が高いほうがよい身体であるとかのような評価——や身体の高さ、立ち居振る舞いは自分が編み出すというよりも、小さいころからの躾や教育によって身につくものです。B、大人が箸も使わず手でご飯を食べていたとしたら、インドのような国では当然であつたとしても、日本で育った人には不思議であり、違和感を持たれるでしょう。人前で鼻をかむことを考えても、欧米ではふつうだと思われていますが、日本では違和感を持って受け止められるでしょう。③このように身体のある方に関する評価や身体の高さ、立ち居振る舞いは自分だけのものなのですが、実は社会的、歴史的な産物でもあるのです。歩き方のスピードも、東京のような都市部において速く、農村部において遅いことは知られています。これはその社会のいわば社会的スピードと対応しているのかもしれない。

ふだんこのようなことはまったく意識しませんが、④社会的規範が宿命的に宿る場としての「からだ」に注目することも大切です。スポーツにおいて、身体が筋肉で覆われていたほうがうまいに違いないとか、人間は身体が大きいほうがスポーツはうまく、強いという見方を当たり前のようにし、どんなスポーツをやっている人もとりあえず筋肉トレーニング、ウエイトトレーニングを考えると考えがちですが、その考え方も、もしかしたら歴史的に作られてきたものかもしれません。

第三に身体感覚、身体意識を含めた全体としての「からだ」です。自分の身体感覚などについてふだんあまり考えることはありません。頭が痛いとき、ケガをして痛むときなどは、特に自分の身体がどうなっているのか感覚しやすいのです。ふだん自分の身体がどのような状況にあるのかは、お腹がすいたときなどはわかりますが、それ以外のときはなかなかわかりにくいものです。

一流選手は、自らの身体がどのようなかを感じながらイメージできるだけでなく、自分の身体感覚、身体意識が明確で、身体感覚と

巣

身体の動きをあわせてとらえることができます。この身体感覚や身体意識を含めると、^⑤身体の別な点が見えてきます。

たとえば、視覚障害者が白杖(はくじょう)をもって道を歩くとき、とてもうまく、あたかもなんら障害がないかのようにスムーズに歩く人がいます。それは単に身体としての手に白杖(はくじょう)を持っているにすぎないのですが、^⑥経験を積むにしたがつてその杖先(えさき)がちょうど指先のように感じられ、道の状況を感じとることができるようになるそうです。

C、テニスを始めたばかりの人のなかには、ラケットが邪魔で、むしろ手で打ったほうがよく当たるのではないかと思う人も多いかもしれません。しかし、練習を重ねるうちに手にラケットを持っていたにすぎないのに、あたかもラケットが手の一部になったように思えてうまく打てるようになります。さらにうまくなるとラケットのどこにあたったのか、どのようにあたったのか、微妙な変化も感覚できるようになります。

これはどういうことなのでしょう。**D**、あくまでも手とラケットは別のものでありますが、経験によつてはラケットが手の一部として感覚され、ラケットも含めて自分の身体として意識されるようになるのです。別の言い方をすれば、肉体としての身体は伸び縮みすることはないですが、身体感覚や身体意識を視野に入れると身体は自由に伸び縮みする存在なのです。

一流のテニスプレイヤーは打った瞬間に、そのボールがアウトかセーフかがわかるといいます。これは二つの意味で重要です。一つはラケットの感覚が自分の手のひらと同じ感覚になっているということ、もう一つはコート(コート)の広さが自分の感覚のなかで内面化されているということです。後者のようにコート(コート)の広さが感覚できるといことは、感覚の広がり(広がり)はコートの隅々(すみずみ)にまで及んでいて、言い方を換えれば身体感覚を含めた「からだ」がコートのはしまで伸びていると考えられるかもしれません。

そしてその伸びた先では自然と一体化するような経験をすることも可能となります。たとえば、素潜り(すくも)で世界の第一人者であったジャック・マイヨール氏は、潜りの世界において、「そこにはブルー(青)しかない。私の体は、重い水の塊(かたまり)にのしかかられ、^⑦しだいにまわりのブルーに溶け、いくようになった」と述べていますし、「あらゆる思考から解放されていて、個人の意識が宇宙の普遍的な意識と一体化する」と指摘しています。

自然と一体となる経験、それは自分が自然、もつといえは宇宙の一部であることを身体で感じることでできる経験であり、自然とのつながりを感じ、自分のなかの自然を取り戻すとても深い快感に包まれる瞬間でもあります。それは特別に訓練をした人(ひと)にしか経験できないのでしょうか。いいえ、そんなことはありません。春の昼下がり、公園の芝生(しば)の上で寝転んでいると芝(しば)がほんのり暖かく、ぽかぽかした太陽の光で眠(ね)くなってしましますね。こんなとき、自分があたかもその芝と一体化したように感じた経験をもった人も多いのではないのでしょうか。この経験も実は身体感覚や身体意識を含めて考えると、肉体を超えて広がっている経験と考えることもできます。さまざまな活動によつて身体(からだ)の拡充(かくじょう)の経験を可能にし、自然とつながり、自然の一部である自分を感覚できる経験。自分は自然とつながっていて一人だけではないという、自然のなかの自分を感覚できて人間本来の力を引き出すことができるのです。

(羽鳥操・松尾哲矢『身体感覚をひらく』による)

問1 **I**・**II**・**III**に入る言葉の組み合わせとして、最も適当

なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア **I**||形態 **II**||質 **III**||量
イ **I**||形態 **II**||機能 **III**||質
ウ **I**||量 **II**||質 **III**||形態
エ **I**||量 **II**||機能 **III**||形態
オ **I**||質 **II**||形態 **III**||機能
カ **I**||質 **II**||形態 **III**||量

問2 **A**・**D**に入る言葉として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ もつとも ウ さて
エ また オ しかし カ たとえば

問3 部①「生理学的な身体、肉体としての『からだ』について、筆者は、どのようなことが大切であると考えていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 運動能力を高めるための筋力や持久力の強さが必要である。
イ 体格を大きくするよりも運動能力を高めることが必要である。
ウ 体格と運動能力のバランスのとれた発達が必要である。

問4 部②「宿命的に宿る」とは、どういうことですか。わかりやすく言いかえている部分を二十字以内で探し、「ということ」につながるように、はじめと終わりの五字をぬき出して答えなさい。

問5 部③「このように」は、どこにかかりますか、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 身体のある方に関する
イ 立ち居振る舞いは
ウ 自分だけのものなのですが
エ 実は社会的、歴史的な産物でもあるのです

問6 部④「社会的規範が宿命的に宿る場としての『からだ』に注目すること大切です」とありますが、「注目すること大切」なのはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 今まで身体に関して常識のように言われていたことが本当であるかどうか考え直すきっかけとなりうるから。

イ 今まで身体に関して常識のように言われてきたことをふまえて、謙虚な姿勢で身体と向き合うことができるようになるから。

ウ 今まで身体に関して常識のように言われていたことをもとにして、それぞれの国や地域にあったトレーニング方法が見つかるはずだから。

エ 今まで身体に関して常識のように言われていたことを変えて、身体能力を効率よく、またバランスよく高めることができるから。

問7 部⑤「身体(からだ)の別な点が見えてきます」とありますが、どのような点が見えてくるのですか。「であるという点」につながるように十五字以内の部分(ぶん)をぬき出して答えなさい。

問8 部⑥「経験を積むにしたがつてその杖先(えさき)がちょうど指先(ゆびさき)のように感じられ、道の状況を感じとることができるようになる」とありますが、それと同じような例をあげている四十五字以上五十字以内(うち)の部分(ぶん)を「こと」につながる形で探し、はじめと終わりの五字(ごじ)をぬき出して答えなさい。

問9 部⑦「しだいにまわりのブルーに溶けていくようだった」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 「しだいにまわりのブルーに溶けていくようだった」という感覚は、どういうこと(こと)のたとえですか。文中(ぶんちゅう)の語句(ごくう)を用いて二十五字以上三十五字以内(うち)で説明(しょうめい)しなさい。

(2) (1)の経験(けいけん)を通じて、どのようなことが可能(可能)になると筆者(しや)は述べていますか。十五字以内(うち)でぬき出して答えなさい。